EOI (essences of the issue)

高齢者の転倒による骨折とその治療はこれまで多くの研究が行われており，臨床的関心は高い．しかし，この転倒と骨折の背景，予防と治療に関わる領域はきわめて広く，十分に吟味されたとはいえない．また，最近の人工関節の進歩，早期術後リハビリテーションプログラムの進め方など再検討を要する課題も少なくない．今回「転倒と骨折」というテーマの「と」が入っている意味は，単に結果としての転倒骨折の分析だけではなく，予防的視点も含めた検討をしたいと考えたためである．理学療法士がどれだけ積極的に関われるか，そめの可能性について考える契機となり得るかが，本特集では問われているといえよう．

■高齢者の転倒骨折の背景と整形外科的治療(五十嵐三都男論文)

大腿骨頸部骨折の転倒の背景を一言でいえば，骨粗鬆症が強く，歩行能力は屋内程度であり，痴呆がやや有るというレベル以上の女性に多いといえる．更にもう1ついえば，大腿骨頸部骨折が，屋内転倒が屋外転倒よりはるかに多いのは，屋外を活発に歩いている高齢者では骨折が少ないことの裏返しである．

■高齢者における転倒・骨折のとらえ方(久保　晃論文)

理学療法を施行した高齢患者を主な対象として，入院中の転倒実態，転倒が訓練効果へ及ぼす影響，大腿骨頸部骨折と体格の関係などを検討した．

転倒の発生は，移動動作や歩行が介助-監視-自立へと向上する患者に多く認められた．ADL変化が転倒の誘発因子となっており，理学療法は両刃の剣であるという悩みを抱えている．

■転倒による大腿骨頸部骨折の早期理学療法(萩原洋子，他論文)

転倒による大腿骨頸部骨折患者の退院時歩行能力を規定する要因として，下肢筋力水準が最も重要であった．また，高齢者であっても，臥床期間中の筋力増強訓練によって顕著な筋力増強効果が得られ，大腿骨頸部骨折患者の歩行能力を改善するうえで早期理学療法の有用性は疑いのないものであった．

本稿では，臥床期間中の早期理学療法の意義と開始時評価，理学療法の実際とリスク管理について述べた．

■転倒による中心性頸髄損傷の理学療法(松本規男，他論文)

転倒という比較的軽微と思われる外傷でも，高齢者においては頸髄損傷に至ることがあり，その実態を報告し，発生機序について考察した．また，不全頸髄損傷の代表例である中心性頸髄損傷の概要と症例報告をとおし，その整形外科的治療と理学療法について論じた．肩手症候群の予防と早期治療，筋力強化と痙性の自己抑制，実用的なADL訓練，包括的なチームアプローチが重要である．

■痴呆を合併した大腿骨頸部骨折の理学療法(池田淑子，他論文)

痴呆を合併した大腿骨頸部骨折患者は骨折を自覚することが少ない．そのため，治療に対するモチベーションが低く，理学療法を進めるうえで特別の工夫が必要になる．

そうした工夫点として，全荷重での歩行訓練のすすめ方，患者観察と習慣化された動作の評価および誘導の仕方，訓練実施上の留意点について，事例を含めて紹介した．

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/08 18:27:49